

## 戦後ドイツの脱ナチ化をめぐって ナチの象徴的建築を事例に（４）

安松 みゆき

### 【要 旨】

小論では、これまで都市単位での建築遺構に注目してきたが、今回は、ナチ政権下では象徴的な意味を持つ事例を取り上げた。そして3回の考察にわたって用いた分析方法、すなわち、破壊（一部破壊も含）、転用、変更なし、廃墟に分析した上で、これ以前に取り上げた事例と比較し検討した。それによって、破壊された遺構には、土地の持つ意味を変えてしまうほどの政治性の有無が深く関わっている可能性が想定された。その場合には、ナチドキュメンテーションセンターなどを設立することで、負の遺産であることを明示していた。ミュンヘンでは文化都市であるため、総統官邸も芸術関係の転用によって脱ナチ化を実施するなど、都市によっても脱ナチ化の様相は異なっていた。脱ナチ化には問題点も残され、この問題は引き続き留意しなければならない。

### 【キーワード】

脱ナチ化、ナチ建築の保存、イコノクラスム、近代ドイツの負の遺産、NS建築遺構

### はじめに

戦後ドイツがナチ時代の遺構においてどのように脱ナチ化を進めていったのかについて、これまでに個々の遺構を例に指摘されているが、それらがどのような方法を取り、また地域によってその方法に独自性があるのかといった詳細かつ俯瞰的な考察は、私見によれば日独ともにまだなされていない<sup>1</sup>。そうした状況を踏まえて、筆者は上記の問題について以前から検討してきた<sup>2</sup>。

小論では、これまで都市単位での建築遺構を取り上げてきたのに対して、今回はそれぞれ異なる場所に残されながら、ナチ政権下では象徴的な意味を持つ事例に注目する。具体的に、ニュルンベルクのナチ党大会施設、ベルヒテスガーデンのヒトラーの山荘、ケルン郊外の親衛隊の教育施設オルデンスブルク・フォークルザンク、リュエゲン島プローラの歓喜力行団の保養施設、ベルリン郊外のオリンピック選手村、パイロイト祝祭劇場を考察対象とする。興味深いことにそれらは一棟を除き現存しており、実見することができた。

そしてこれまで検討してきた分析方法、すなわち、破壊（一部破壊も含）、転用、変更なし、廃墟に分析した上で、これ以前に取り上げた事例と比較して、建築における戦後の脱ナチ化の現状を総合的に把握する。なお、これまでは分析項目に合わせて建築を概説しつつ考察してきたが、

ここでは個々の建物を軸にして分析を行う。本論の検討の最終的な目的では、これまで行ってきた考察を総合した結果を導き出すこととする。

## 1 ニュルンベルクのナチ党大会施設 【図1】 現存 一部破壊、転用

ナチ党は当初党大会をミュンヘン、ワイマールなどで行ってたとされるが<sup>3</sup>、政権を掌握後にドイツのほぼ中央に位置するニュルンベルクに党大会を行うための広場や関連施設を計画した。ナチを代表する建築家アルベルト・シュペーア (Albert Speer : 1905-1981) の設計による。すべてが完成していないものの、最も知られているのが、舞台を併設した野外でイベントを行うツェッペリン広場であろう。ニュルンベルク郊外のルイトポルトハインに、ベルリン博物館に所蔵されるギリシャ時代の壮大な遺構《ペルガモン祭壇》を手本とした舞台が置かれ、その手前に広大な広場が造られた。舞台の中央には演説台が設置され、毎年1月31日にはナチ党大会がその場所で開催された。ヒトラーは中央の演説台に立ち、手前の広場に数万のナチ党の兵士が整列して壮大な一大イベントが実施されたことが、映画監督レニ・リーフェンシュタールによる党大会の映像などで確認できる<sup>4</sup>。この舞台は、ナチの信奉したギリシャを再現した新古典主義のデザインを取り、最もナチ党を象徴する建物のひとつと言える。その他の関連施設として、ルイトポルトアリーナは戦後撤去され<sup>5</sup>、5月広場と国際会議場は未完成の状態で見逃されている。戦後はいずれもニュルンベルク市の所有となるものの、ナチの残像として忘却され、未完成だった会議場は倉庫として使われていたとされる。



図1 《旧ツェッペリンフェルド、ニュルンベルク》

ナチを象徴するツェッペリン広場は、中央のハーケンクロイツの印がアメリカ軍に爆破され、1967年には舞台が破壊され<sup>6</sup>、中央の一部のみが廃墟として残された状態を見せている。1994年まで兵士の広場としてアメリカ軍によって利用されていた<sup>7</sup>。そこで時には軍事パレードが行われ、時には野球がプレーされ、また舞台を用いてロックなどの音楽の野外コンサートなども開催されたと言う<sup>8</sup>。ヒトラーが演説した演説台は負の文化遺産として残されているが、舞台の大半が壊されていることや、舞台に大きく象徴的に聳えていた鉤十字を持つ鷲の印が取り外されていることから、ツェッペリン広場の全体の印象は、競技会場の遺構のような印象に変わっている。ただし、この対処法は、もともとツェッペリン広場を設計したシュペーアが廃墟をイメージしていることから<sup>9</sup>、結果的にかれの意向に合致した方法が取られたとも見なせることになり、廃墟が必ずしも脱ナチ化にならないことを示している点で留意されなければならない。

未完成のままに残された会議場の建物は、その一部を利用してナチのドキュメンテーションセンターが置かれ、ナチの歴史を展示する場になっている<sup>10</sup>。建物自体が未完成のため躯体がそのまま剥き出しになっている箇所が多々認められ、それによってナチの成就が未完に終わった印象を与えている。ツェッペリン広場の舞台では1985年にこの場所がドイツの歴史を学ぶ場所であることを告知する展覧会が開催されている。

いずれも現存するものの一部が破壊されて、用途が多目的広場やナチのドキュメンテーションセンターなど、元の目的とは異なっていることから、「破壊」に加えて「転用」にも分類するこ

とができる。負の遺産としての評価をそれぞれの遺構に与えることも忘れられていない。党大会の広場は全体の印象が変わってしまっているが、今でもヒトラーが演説した演説台が残されている。側に説明板を置くことで、負の遺産として把握できるようになっている。さらに他の未完成の施設は、まさに負の遺産を展示するための場所として、ナチのドキュメンテーションセンターとして活用されている。負の遺産の建物で、当時の負の歴史を振り返るといふ最良の利用方法が取られている。

ニュルンベルクの遺構は、前述したようにナチ党の最も象徴的な場のひとつであったため、それを後世にいかなるかたちで残していくのが問われていると言える。もともと廃墟を意図したシュペーアのデザインで設計されたツェッペリン広場の舞台は、大半が破壊されることで脱ナチ化を進めているが、意図的にシュペーアの目的に合致してしまうために、必ずしも破壊が脱ナチ化を十分に実現しているとは言い難い。その意味で、ツェッペリン広場の対応は今後注目される。しかし会議場にはナチのドキュメンテーションセンターの施設が置かれ、ナチの歴史を振り返る教育が実施されており、その施設では明確な脱ナチ化が行われているとして高く評価できるだろう。

## 2 ベルヒテスガーデンのヒトラーの山荘 【図2】 現存、転用

ヒトラーはアルプスのベルヒテスガーデンに山荘を造り、そこで政治を司った。そのためその山荘のある小さな村は、第三帝国時代にミュンヘン、ベルリン、ニュルンベルクに次いで重要な権力の中心地と見なされ、ヒトラーだけでなく、ゲーリングを始めとする政府高官の別荘も造られて「総裁に関する立ち入り禁止区域」になったとされる<sup>11</sup>。

今回注目するのはヒトラーの山荘である。具体的な建物として「ベルクホフ Berghof」と、山頂に造られた「ケールシュタインハウス Kehlsteinhaus」の二棟である。前者についてだが、別荘が建てられたオーストリアのオーバーザルツブルクは、当時避暑地と知られており、1927年にヒトラーがはじめて来た際に宿泊したホテル「トルコ人へ」が気に入り、1933年に4万マルクで購入したと言う<sup>12</sup>。当初はその場所の名前「ヴァッヒェフェルドの家 Haus Wachefeld」で呼ばれていたが、ヒトラー自らの設計によってマルティン・ボルマン (Martin Bormann : 1900-1945) を工事責任者に据えて増改築を行い、「ベルグホフ (山の宮殿)」となった<sup>13</sup>。外観はこの地によく見られる切妻屋根の農家の風情を見せている。メインの大空間には、3.6mX9mの大きなパノラマの窓が設けられ、そこからアルプス山脈の光景が自由に眺められたとされる<sup>14</sup>。室内装飾は、建築家トローストの未亡人が手がけている<sup>15</sup>。ヒトラーは遺言でこの建物をドイツ国家の財産にすることを希望したとされるが、終戦末には親衛隊によって、そして戦後はアメリカ軍によって完全に破壊されてしまい、現存しない<sup>16</sup>。



図2 《ケールシュタインハウス、ベルヒテスガーデン》

ベルヒテスガーデンには、もうひとつのヒトラーの山荘がある。「鷹ノ巣」とも呼ばれる「ケールシュタインハウス」である。1939年のヒトラー50歳の誕生日に、ナチ党からの誕生祝いとして建設された<sup>17</sup>。もともとはティーハウスとして考えられたと言う<sup>18</sup>。建築家はヒトラーお気に入りとも言われたミュンヘンのローデリヒ・フィック (Roderich Fick : 1886-1955) である。建

物のアプローチには、これまでにない工夫が施された。まずは山の険しい斜面に狭い道を敷き、途中に踊り場にあたる平地を整備し、さらにそこを入り口として126mの深いトンネルを作り、1834mの高さの山頂の建物までは黄金のエレベーターで行くように計画された<sup>19</sup>。断崖の上に造られた山荘は、まさに鷹の巣のイメージに合致するものである。建物の外観は、ベルクホフ同様の切妻屋根をとり、山頂の豪雪に耐えられるような壁には頑丈な切石を積んだシンプルなデザインを見せている。しかしヒトラーは気圧が低いことからよく頭痛がしたため、実際にあまりここに来ることはなかったと言う<sup>20</sup>。

建物の外観は農家の面持ちの郷土様式により、装飾のない簡素な印象を与えている。書齋もしつらえた内部も余計な装飾はなく、メインの空間となる居間にはムッソリーニから贈られたとされる暖炉があり、それがこの部屋の雰囲気を決めている。なお暖炉は今でも残されており、その上には日本の天皇から贈られた織物が掛けられていたという指摘もある<sup>21</sup>。

戦後は米軍の施設となった。1951年に爆破せずに保存することをベルヒテスガーデン郡長テオドル・ヤコブ (Theodor Jacob) によって要望が出され<sup>22</sup>、それ以来ベルヒテスガーデン郡の所有となり、当時のままに保存され、レストランとして解放されている<sup>23</sup>。この建物の負の歴史については一部展示があるものの、レストランとしての転用が負の遺産をかき消している印象が強い。稀に見る光景を手に入れられる観光資源として活用されているが、負の遺産であることとの両立が難しい事例とも言える。

### 3 親衛隊の教育施設オルデンスブルク・フォーゲルザンク 【図3】<sup>24</sup> 現存、転用

オルデンスブルク・フォーゲルザンクは、およそ100haの敷地に造られた施設として、ニュルンベルク党大会会場とプローラの夏の避暑地と比較可能とされるほどの規模の大きさで知られる<sup>25</sup>。1934年から41年にかけて造営され、1936年から親衛隊の教育施設として機能した。ナチ政権における新しいドイツ人育成の教育では、スポーツが基本に据えられていたと言う<sup>26</sup>。第二次世界大戦が始まると兵士の教育が進み、そのうち100名がポーランドや白ロシア、ウクライナに派遣されていたと言う<sup>27</sup>。1942-44年にはアドルフ・ヒトラー学校として運営されたが、1944年の爆撃によって



図3 《オルデンスブルク・フォーゲルザンク》

部分的に打撃を受け、その機能の終わりを告げた。しかし施設はほぼそのまま残存している。建物はドイツの近代建築「ノイエス・バウエン Neues Bauen」でも活躍したクレメンス・クロッツ (Clemens Klotz : 1886-1969) によるもので、メインの建物は古代ローマを彷彿とさせるデザインを見せているが、20世紀前半に流行する建物の模範と見なされている<sup>28</sup>。

戦後になると、残存した施設は1945年に米軍の所有となり、1947年に壊す話もあったもののコストがかかるために断念された<sup>29</sup>。その後米軍から連合国の英軍の基地に移され、1950年からはさらにベルギー軍に移行されるなど、冷戦の基地としての役割を担われ、建物自体はほぼそのまま軍施設として活用されてきた<sup>30</sup>。

このオルデンスブルク・フォーゲルザンクはエifelという地域に置かれていた。近年の利用では、そのエifelが2002年に国立公園にする話が出て指定され<sup>31</sup>、「国際的な場所」として2006年に一般に公開されることになったことで新たな動きが始まった<sup>32</sup>。具体的には「フォー

「ゲルザンク国際の場」共同会社を2008年に設立し、その下で2012年にフォーラムと呼ばれる中心に置かれた施設を改築し、2016年にナチのドキュメンテーションセンターとエイフェル国立公園センターの入った新フォーラムとしてオープンした<sup>33</sup>。

この改築によって第三帝国時代の建物は、半分が負の遺産を伝える施設ナチドキュメンテーションセンターとして、残り半分がエイフェル国立公園を紹介する施設として、それぞれの役割で利用されることになったのである。ナチドキュメンテーションセンターでは、ナチの負の歴史が展示され、その中でオルデンスブルク・フォーゲルザンクの当時の状況も写真などを用いて伝えられている。

この施設の脱ナチ化において注目されるのは、国立公園という立地の自然の価値を評価しつつ、歴史的な負の価値においても目をそらさずに、その場の実情を理解させようとする姿勢である。自然と負の遺産の共存を目指す珍しい遺構例と言える。

#### 4 リューゲン島プローラの歓喜力行団の保養施設 【図4】 現存 転用

ナチ党のアーリア人による正しい政治世界のモデルとされた歓喜力行団は、保養施設を北ドイツのリューゲン島のプローラに決め、1936年から3年かけて造営したが、すべて完成したわけではなかった<sup>34</sup>。それを主導したのはドイツ労働者前線（ADF）の長であったロベルト・レイ（Robert Ley：1890-1945）である。歓喜力行団は、1934年の5月から海水浴の旅行を宣伝に打って出たと言う<sup>35</sup>。それを受けて1935年に労働者のための巨大な海水浴場の整備が計画された<sup>36</sup>。五ヶ所が候補としてあがり、北海、現在ポーランドのKolberg（Kolberg）、インメンドルフ（Im mendorf）、東プロイセンそしてリューゲン島のプローラがそれに該当する。その計画の中で最後のプローラだけが実現に結びついた。



図4《プローラの歓喜力行団の保養施設》

こうした提案はヒトラーに由来するものとされたが、実際にヒトラーは一度もプローラに行ったことがなかったと言う<sup>37</sup>。現在ではロベルト・レイが主導権を握っていたと見なされている<sup>38</sup>。レイの目標は、年間1400万人を一週間このプローラに訪問させることだった。

1935年にレイは、オルデンスブルク・フォーゲルザンクを設計した建築家クレメンス・クロッツに仮計画案を作成させ、9月のニュルンベルク党大会で公開した<sup>39</sup>。1936年初旬にコンペを開き、クロッツとエリッヒ・ツッ・プトリッツ（Erich zu Putlitz：1892-1945）が祝祭ホールを設計することに決まった<sup>40</sup>。建設費用は略奪資金が当てられたと言う<sup>41</sup>。

もともとリューゲン島は19世紀から海水浴場として知られ、しかもヨーロッパの反ユダヤ主義の動きも認められるところであり、20世紀初頭にはすでに「全員ストップ。ユダヤ人がいる」といったポスターが男性の着替え室に貼られていたと言う<sup>42</sup>。そのほかにもユダヤ人を隔離する動きとして、例えばユダヤ人のみを受け入れるホテルが1922年には認められたり、ユダヤ人だけの海水浴場なども造られていた<sup>43</sup>。

実際の施設建設の労働は、ドイツに併合されたポーランド、チェコ、ロシア、ウクライナ、フランスなどからの強制労働者によって進められた。かれらはそれぞれの祖国から牛を輸送する貨物列車に乗せられてリューゲン島に移送され、日曜以外は12時間から14時間の労働を強いられ

ていたと言う<sup>44</sup>。

戦後には東西に分断された東ドイツに組み込まれた。その時代には軍関連施設となり、1万人の兵士の基地となっていたと言う<sup>45</sup>。その後東西を隔てる壁が壊されて1992年から文化遺産として保存されてきている。1996年になると、ロッテルダムの建築家ベルト・フォン・メンゲルネ(Bert von Mengelne：生没年不詳)によってプローラにヨーロッパの文化交流の場としての価値が見出され、2004年に多くの人の賛同を得て、その活用法が進められてきている。建物の25%は改築され、400人用のユースホテルとして、また2014年からは一般向けの住居として売買されている。

このように現在では一部完成していた建物の内部改築を行い、宿泊施設や休暇用住居として転用されている。ただし、その一角にナチ時代の遺産である説明板を立て、さらにナチドキュメンテーションセンターを設けて、負の遺産としての歴史があることを公にすることを忘れていない<sup>46</sup>。

## 5 ベルリン郊外のオリンピック選手村 【図5】現存 廃墟 保存

1936年8月1日から16日にかけてベルリンで夏のオリンピックが開催された。その選手村はオリンピックスタジアムから14kmも離れたエルスタールという場所にあった<sup>47</sup>。ドイツ国防軍の土地が使われたため、大会後は国防軍に戻され利用された<sup>48</sup>。現在では廃墟となっているが、一部が保存に向けて公開されている。設計はスタジアムをデザインしたヴェルナー・マルヒ(Werner March：1894-1976)である<sup>49</sup>。自然を踏まえ、ひとつの都市として造り出された選手村は、世界に向けてナチの都市建築の質の高さを誇示しようとした事例のひとつとされる<sup>50</sup>。ヒトラーは巡回した際に「世界で最も美しい村」と評価したと言う<sup>51</sup>。



図5 《ベルリン・オリンピック選手村 プール》

145の建物はドイツの都市の名前が付けられた。田中辰明氏はオリンピック選手村について2015年に実見してまとめており<sup>52</sup>、それによると、選手宿舎は平屋建物136棟、二階建ての5棟、調理等と38の食堂からなるレストラン棟、管理棟、レセプションの建物、屋内プール、サウナ、体育館、病院と医務棟、劇場とテレビの生中継の試験運用も行われたテレビ室を備えたヒンデンブルク・ハウス<sup>53</sup>からなっていた。敷地の南西部には人工の池が造られ、そこでサウナの後に体を冷やしていたと言う。そのサウナの置かれた人工池には、当時ベルリン動物園の水鳥を無償で借りてきて、そこに放されたという指摘もある<sup>54</sup>。

なお当時の日本の新聞を改めて見ると、日本選手団が入所する建物に併設して日本風呂を作ることが計画されていたことがわかる<sup>55</sup>。2018年に確認のために現地を訪れたが、日本選手団の建物は現存せず、現在は草地になっている。

オリンピック後は、前述したように、元々兵舎としての利用を前提にしていたため、例えば国際食堂棟は病院として、ヒンデンブルク・ハウスは兵学校と講堂として利用された<sup>56</sup>。東西冷戦時代にはソ連軍の兵舎となり、さらに敷地内には新しく集合住宅が増築され<sup>57</sup>、1992年にソ連軍が撤退して以降、現在は一部廃墟となりながらも、文化遺産として保存する動きが出始めていると言う<sup>58</sup>。プールや食堂、宿泊施設などは当時のままの姿で、しかも比較的良好な状態で現存し

ている。

これら建物の保存に関しては、ナチ時代だけでなく、増築したり転用して使われていた東ドイツの時代の両時代から見ていかなければならない。まだ保存が決まったわけでないため、修復などは手付かずの状態となっている。いずれにせよ現段階では、この施設におけるナチ時代の記憶は、負の保存の意味ではあまり強調されているとは言い難い。よく知られるようにオリンピックの時にはすでにユダヤ人排斥の動きも進めており、オリンピックは決してナチにおいて平和の祭典ではなかったと言われてきている。しかしながら、現在は史実としての保存が優先されていると理解される。今後負の遺産として保存することがどの程度公にされていくのか、今後の動きを注視する必要がある。

## 6 バイロイト祝祭劇場 【図6, 7】 変更なし

19世紀の当時バイエルン王ルートヴィヒ2世の援助を受けて、作曲家リヒャルト・ヴァーグナーが自らの作品を上演する劇場を計画して1876年運営したものである。音楽が最高のかたちで伝えられるように、オーケストラ・ピットを舞台よりも下に設置したり、客席の椅子も音響効果を出すように装飾的なものを廃している<sup>59</sup>。

この建物はナチ以前から建てられていたものだが、ヒトラーが政治に利用したことで負の意味が強い。では、建物を変更せずにいかにナチ時代の負の意味を後世に伝えていくのか。

ここでは、正面の野外の庭の一角に、それを伝えるモニュメントが造られている。それは、当時のオーケストラや歌手のなかで、ユダヤ人であったがために収容所に送られて命をなくしたことを伝える説明板である。それが坂道の塀を兼ねるように整然と並べられて、ひとつのモニュメントの役割も担っている。これによってこのバイロイトの祝祭劇場は、脱ナチ化を実現している。

また、ウド・ベルムバハ (Udo Bermbach : 生没年不明) によると、観客の層に変化があると言う<sup>60</sup>。ナチ時代には、音楽が国民のためとされたことで公務員、看護婦などの職の場合、無料になり、1941年からは戦争の祝祭としての役割に変わり、傷痕軍人やかれらを手当をする看護婦などが招待されるようになった。戦後1951年頃にはナチを批判するエリート層が多く足を運んでおり、1970年代からは収入と教育の高い人々が来る場所へと変わったとされる<sup>61</sup>。

## 7 従来事例との比較において

今回の事例のほとんどが負の遺産であることは公示されていた。特に負の意味が強調されて現



図6 《バイロイト祝祭歌劇場》



図7 《バイロイト祝祭歌劇場前の負の記念碑》

存していると言えるのは、ニュルンベルク党大会の一連の建物である。大半を破壊し、さらにナチドキュメンテーションセンターを造ることで現存している。その建物の持った政治的な罪の重さを測って保存しているところに特徴があると言える。

一方で、当時を否定的に強調していないと感じられるのが、ヒトラーのベルヒテスガーデンの別荘である。絶景の環境に置かれた建物は、現在はレストランになり、多くの観光客がそこで絶景を堪能しにやってくる。

ではなぜこのように対応に差が生じているのだろうか。おそらくベルヒテスガーデンの対応が許されているのは、私的な時間を過ごす空間として造られ、しかし実際にヒトラーがあまり利用しなかったことが、ひとつの要因のように思われる。というのは、この建物の麓にあったベルクホフは、ヒトラーが国賓を迎えて具体的に政治を行っていた施設となっているが、戦後は完全に破壊されてしまっているからである。言い換えれば、保存する際に、該当の建物をヒトラーがどれだけ政治的に利用したのかといった判断が、負の遺産としての強調の有無に関わっている可能性が推定されるのである。

また、オリンピック選手村の場合には、これから保存される動きが見られるが、そこには負の遺産としての意味をベルクホフのように強調されているようには理解できない。負の烙印を押すことよりも、ナチ時代ではあるものの、史実をそのまま後世に伝えようとする姿勢が優先されているように思われる。たしかにオリンピックはナチのプロパガンダとして大きな成果を残しているが、保存の立場は、ナチによって利用されてしまったオリンピックとして解釈されていると言い換えられるのかもしれない。

このように第三帝国に関わる建物をいかに後世に伝えていくのか。そのときの基準のひとつが、土地の霊(ゲニウス・ロキ)を変えてしまうほどの政治性の有無の存在が鍵を握っていると考えられる。建てられた土地において、その土地の持つ意味を破壊してしまうほどの負の役割を担った建物は、破壊あるいは一部破壊されている。さらに、その利用は廃墟あるいは負の遺産として説明するドキュメンテーションセンターに担わせている。たしかにベルリン、ミュンヘンでの事例でも、ゲシュタポや党本部の建物は破壊されていた。ベルリンの場合には、ナチドキュメンテーションセンターが設置されており、ミュンヘンの場合には、ゲシュタポの前には宮殿だったため、銀行の建物に変えられていたが、ナチ党本部の建物はながらく破壊され、跡地になっていたが、近年ナチのドキュメンテーションセンターが造られた。

今回現存する作品の多くは、政治に関わると言っても文化的な施設が多い。そのため、転用の方法で現存されていた。それらの転用の幅の広さに特徴がある。オルデンスブルク・フォーゲルザンクは国立公園の自然博物館、プローラは保養地、そしていずれもドキュメンテーションセンターを設置することを忘れていない。ベルヒテスガーデンの場合には、麓にドキュメンテーションセンターを置くことで、レストランとして転用されている。オリンピック村は廃墟のままであり、今後その保存が始まっていく状況にある。完全な文化施設パイロイト祝祭劇場は、当時からなにも変わることなく、戦前戦後も同じ目的で運用されている。しかしユダヤ人を理由に追放殺害された音楽家に対する蛮行については、建物の外庭に説明板を階段状に示すことでその負の意味を公開することを忘れていない。

今回扱った遺構は、部分的な相違はあるものの、大半は負の遺産であることを公にするかたちを取りながら保存されていたことが確認できた。



## おわりに

小論では、ナチ政権下では象徴的な意味を持つ事例、具体的に、ニュルンベルクのナチ党大会施設、ベルヒテスガーデンのヒトラーの山荘、ケルン郊外の親衛隊の教育施設オルデンスブルク・フォーゲルザンク、リュウゲン島プローラの歓喜力行団の保養施設、ベルリン郊外のオリンピック選手村、バイロイト祝祭劇場に注目した。その上で、これまでの検討で用いていた破壊（一部破壊も含）、転用、変更なし、廃墟に分析して考察した。それによって、ナチドキュメンテーションセンターが設置されたり、ホテルとして利用される方法が取られたり、国立公園との関係で自然と共存する場合や、庭に負の遺産であることを明示する説明板を並べるなど、各施設で異なる脱ナチ化を示していたことがわかった。さらに今回の考察では、対象となった遺構はほぼ実見できるかたちで残されていた。それが現存することに注目するならば、新たな仮説が考えられた。つまり破壊された遺構には、土地の持つ意味を変えてしまうほどの政治性の有無が深くかかっている可能性が想定された。その場合には、何もなかったかたちで終わらずに、ナチドキュメンテーションセンターを設立したり、建物内でそれらを展示するコーナーなどを設けることで、負の遺産であることを公に明示していた。

しかしすべてが脱ナチ化に成功していると言うには問題も残された。風光明媚な場所のケールシュタインハウスは、レストランとして経営され、負の歴史の掲示があるとは言え、観光的な意味が強く認められた。

ドイツでは、戦後のナチに対する政治的な制圧が取られ、日本に比べて戦後の戦争責任についてはかなり進んで行われている。たしかにそれを裏付けるような動きが認められたが、詳細に見ると、ベルリンに比べてミュンヘンでは、脱ナチ化の動向が遅れていたことなども確認できた。例えば、総統官邸の周辺に一時期負の遺産であることを掲示板で説明しつつも、近くにナチドキュメンテーションセンターを設立したことでその表示は取り外されてしまった。そのため、ナチドキュメンテーションセンターに入らないと、過去の意味はすぐに理解できない。おそらく総統官邸が元の国王広場と絡んでいたことが関係している。ミュンヘンの場合にはゲシュタポの建物がそうであったように、元の伝統的な意味を重視する傾向が認められた。ミュンヘンは近代に入って文化都市という肯定的な歴史を刻んでいた。戦後もそのまま残された総統官邸は芸術的な使用によって脱ナチ化を行っていた。その街の歴史とナチの負の歴史をいかに共存させていくのか、それはその街ごとに異なっていることが理解された。

そうした意味からしても、またオリンピック村がまだ保存が中途の状態にあるように、街の歴史と負の歴史をいかに共存させていくのか、今後も注視していく必要があるだろう。

小論は共同研究「日本近代における〈イコノクラスム〉—破壊をめぐる視覚表象研究」科研基盤研究(B)（課題番号5H03179 代表者：早稲田大学教授丹尾安典）によって進められた。

## 欧文要旨

### Die Entnazifizierung der NS-Gebäude in Deutschland (4) Die symbolischen Beispiele

In diesem Artikel untersuchte ich die Entnazifizierung der symbolischen NS-Gebäude nach dem Zweiten Weltkrieg im Vergleich der Berliner und Münchner Beispiele. Wie ich in meinem Aufsatz in 2017 geschrieben habe, kann man die Behandlung der NS-Gebäude allgemein in vier Typen einordnen, d. h. Zerstörung, Zweckveränderung, unveränderte Weiterbenutzung

und Vernachlässigung (Ruine). Im Fall der symbolischen NS-Gebäude verwendet man sowohl in Berlin wie in München die ähnlichen Methoden, beispielsweise die Entfernung der NS-Symbole wie Hakenkreuz und die Errichtung der Informationstafel über die NS-Geschichte. Andererseits wurden die Gebäude, die zu stark mit dem damaligen Politik verbunden sind, wie z. B. Gestapo, ganz zerstört. In der Entnazifizierung sind die Unterschiede zwischen den Städten bemerkbar. In München versucht man sie durch die Verwendung der Gebäude als Kunst- und Kulturanstalten. Am Ende dieses Artikels habe ich die Problemen in der bisherigen Entnazifizierung hingewiesen und verlangt, daß man auf die künftige Behandlung der NS-Gebäude aufmerksam sein soll.

- 1 ナチ建築の遺構の基本データの整理は、すでに指摘しているようになり進められている。Maik Kopleck : *Obersalzberg 1933-1945*, Berlin 2015. 例えば、松本氏は、記念碑として保存の方法に注目して、ナチ時代の加害者の遺構を取り上げている。とはいえ事象を指摘しているだけにとどまっている。松本彰『記念碑に刻まれたドイツ、戦争・革命・統一』東京大学出版会、2012年、253-254頁。
- 2 共同研究に基づく筆者の研究成果は以下にまとめている。拙稿「戦後ドイツにおける脱ナチ化の様相 (1) —ベルリンの場合—」『別府大学大学院紀要』第19号、研究ノート、2017年、107-116頁。拙稿「戦後のドイツにおける脱ナチ化の様相 (2)」『別府大学紀要』第59号、2018年、1-13頁。拙稿「戦後ドイツの脱ナチ化をめぐる—2017年度開催の展覧会を事例に (3)」『別府大学紀要』第60号、2019年、1-13頁。
- 3 松本彰前掲書、138頁。
- 4 松本彰前掲書、138, 140-141頁。松本氏は戦後について簡単に述べているだけで終わっている。また党大会については *Deutschland er macht*, 1935,にも写真で紹介されている。他に浜本隆志「ナチス時代の祝祭—ニュルンベルク党大会を中心に」北川他編『想起する帝国ナチス・ドイツ「記憶」の文化史』勉誠出版、2017年、115-152頁を参考。
- 5 松本氏によれば栄誉の碑が残されていると言う。松本彰前掲書、141頁。
- 6 Hrsg. v. Ingrid Bierer, a.a.O., S. 92 u. 95.
- 7 Hrsg. v. Ingrid Bierer : *Das Gelände, Dokumentation, Perspektiven, Diskussion, 1945-1955, Ausstellungskatalog des Dokumentationszentrums Reichsparteitagsgelände*, Nürnberg 2005, S. 27 und 30.
- 8 Hrsg. v. Ingrid Bierer, a.a.O., S. 30. 例えば1978年7月1日に自由のシンボルであるロックのコンサート、ボブ・ディランの野外コンサートが行われている。なおボブ・ディランは、2017年にノーベル文学賞を受賞している。Hrsg. v. Ingrid Bierer, a.a.O., S. 114f
- 9 Björn Hengst : *Zeppelinfeld in Nürnberg, Hitlers maroder Aufmarschplatz*, in : Spiegel Online <https://www.spiegel.de/politik/deutschland/zeppelinfeld-in-nuernberg-hitlers-maroder-aufmarschplatz-a-1028393.html>
- 10 Ulrike Grammbotter : *Das Dokumentationszentrum Reichsparteitagsgelände in Nürnberg*, in : *Kunstchronik*, S.473-477.
- 11 Maik Kopleck *Obersalzberg 1933-1945*, S. 8f. ボルマンが強制的に周囲の土地を買収して、関係者の建物に変えていったとされる。
- 12 阿部良男『20645日の軌跡 ヒトラー全記録』柏書房、2001年、322頁。

- 13 阿部良男前掲書、322頁。Maik Kopleck Obersalzberg 1933-1945, S. 12. ベルクホフは山荘以外に、山岳宮殿と訳出可能である。単なる別荘とは異なって、ここで第二の政治の場にしていたためである。ここでは一般的に用いられている用語を使うことにした。
- 14 Maik Kopleck, Obersalzberg 1933-1945, S. 12.
- 15 阿部良男前掲書、322頁。Maik Kopleck Obersalzberg 1933-1945, S. 12.
- 16 阿部良男前掲書、323頁。Maik Kopleck Obersalzberg 1933-1945, S. 13. デスピナ・ストラディガコス氏によれば、1944年春以降に連合国が爆撃をしたと言う。しかしうまく破壊できたわけではないと指摘している。デスピナ・ストラディガコス『ヒトラーの家』（北村京子訳）作品社、2018年、340-345頁。
- 17 MaiK Kopleck, Obersalzberg 1933-1945, S. 25. 日本の織物の壁掛けを飾っていたということだが、よく目にする当時の写真での壁掛けの織物は、ルネサンス時代のもので、ミュンヘンの画廊Berlinheimerから入手した資料が公開されている。そのため、この指摘を裏付けるものはまだ確認がとれていない。Florian M. Beierl : *Geschichte des Kehlsteins, Ein Berg verändert sein Gesicht*, Berchtesgaden 1998, S. 112f.
- 18 Florian M. Beierl, a.a.O., S. 25.
- 19 3000マルクの費用がかかったと言う。Florian M. Beierl, a.a.O., S. 112f.
- 20 Maik Kopleck, Obersalzberg 1933-1945, S. 25.
- 21 MaiK Kopleck, Obersalzberg 1933-1945, S. 25.
- 22 MaiK Kopleck, Obersalzberg 1933-1945, S. 25.
- 23 阿部良男氏によれば2001年の段階ですでに一般解放されていることがわかる。しかしナチ時代のことを振り返っているのか否かといったことに関しての指摘はない。阿部良男前掲書、323頁。
- 24 小塚真一郎はミュンヘンの郊外にあったゾントホーフエンのヒトラーシュレーを訪問している。東京朝日新聞 昭和16年5月16日。Entnazifizierung, in : Hrsg. v. Klaus Ring u. Stefan Wunsch : *Bestimmung Herrenmensch NS-Ordensburgen zwischen Faszination und Verbrechen*, Dresden 2016, S. 336-339. Alfons Kenkmann : Vom Nachhall der Hybris zur Nachhaltigkeit historischen Lernens? In : Hrsg. v. Klaus Ring u. Stefan Wunsch : *Bestimmung Herrenmensch NS-Ordensburgen zwischen Faszination und Verbrechen*, Dresden 2016, S. 358-366. Frank Pütz : Die NS-Ordensburg Vogelsang, in : *Burgen und Schlösser*, vol.44 2003, S. 24-35. Werner Durth : Architektur und Städtebau der 30er/40er Jahre, Bonn in : Die Nationalkomitee für Denkmalschutz : *Schriftenreihe des Deutschen Nationalkomitees für Denkmalschutz* 46, 1993.などを参照。
- 25 *NS-Dokumentation Ausstellung Gelände Angebote, Bundesministerium für Umwelt, Naturschutz, Bau und Reaktionsicherheit, Die Beauftragte der Bundesregierung für Kultur und Medien*, 2016, S. 4. (以下NS-Vogelsangと略記) 松本氏もわずか数行で2006年から公開されて建物が現存することを指摘している。松本彰前掲書、123頁。Hrsg. v. Ingrid Bierer, a.a.O., S. 180.
- 26 NS-Vogelsang, S. 4
- 27 NS-Vogelsang, S. 5.
- 28 Monika Herzog : Die Ordensburg Vogelsang, Nationalsozialistisches “ Erbe” im Nationalpark Eifel in : *Reinische Heimatpflege* 2, 2004, S. 89f.
- 29 Monika Herzog, a. a. O., S. 92.

- 30 NS-Vogelsang, S. 5.
- 31 Monika Herzog, a. a. O., S. 92.
- 32 NS-Vogelsang, S. 10.
- 33 NS-Vogelsang, S. 10f.
- 34 Hrsg.v. Dokumentationszentrum Prora e.V. : *das "Paradies" der "Volksgemeinschaft"*, *Das KDF-Seebad in Prora und die Deutsche "Volksgemeinschaft"*, Berlin 2016, S. 7. (Das Paradies 2016と略記)  
Hrsg. v. Ingrid Bierer, a.a.O., S. 180.
- 35 Das Paradies 2016, S. 9.
- 36 Das Paradies 2016, S. 42.
- 37 Das Paradies 2016, S. 42.
- 38 Das Paradies 2016, S. 42.
- 39 Das Paradies 2016, S. 43.
- 40 Das Paradies 2016, S. 43.
- 41 Das Paradies 2016, S. 43.
- 42 Das Paradies 2016, S. 44.
- 43 Das Paradies 2016, S. 44.
- 44 Das Paradies 2016, S. 46. なお松本氏は未完のまま未使用だったと指摘している。松本彰前掲書、142頁。
- 45 Martin Kaule : *Mecklenburg- Vorpommern 1933-1945*, Berlin 2015, S. 77.
- 46 この場所は東ドイツの時代に軍施設だったと言う負の意味を包括しており、ナチス時代の負の意味だけで終わるわけではないとの意見もある。戦後の動きについては以下を参照。Stefan Stadtherr Walter : *Auferstanden aus KdF-Ruinen, Der >>stalinistische Kasernengrossbau<< Prora und seine heutige Rezeption*, in: Landesamt für Kultur und Denkmalpflege Mecklenburg- Vorpommern (Hrsg.) : *Alles Platte? Architektur im Norden der DDR als kulturelles Erbe*, Zwickau 2018, S. 158-174.
- 47 アンドレア・シュタインガルト 『ベルリン <記憶の場所>を辿る旅』 谷口健治他、昭和堂、2004年、56頁。
- 48 キアラン・ファーヘイ 『ベルリン廃墟大全 ナチス、東西分割、冷戦・・・光と影の街を歩く』 梅原進吾訳、2016年、青土社、121頁。
- 49 Maik Kopleck : *Berlin 1933-1945*, Berlin 2004, S. 76f.
- 50 Magdalena Buschart : *Das Reichssportfeld*, in : *Kunstabibliothek und Pädagogischer Dienst, Staatliche Museen Preussischer Kulutrbesitz : Olympische Spiele in Berlin*, Berlin 1991, S. 13. 北川千香子「集合的記憶としてのワグナー —ヒトラーによる受容とその影響」北川他編『想起する帝国 ナチス・ドイツ「記憶」の文化史』 勉誠出版、2017年、153-192頁。
- 51 アンドレア・シュタインガルト前掲書、54頁。Rainer Schmitz und Johanna Söhningen : *Das Ur-Landschaft. Überlegungen zur Landschaftesgestaltung der völkischen Moderne*, erläutert am Beispiel des Olympischen Dorfes der Sommerspiele von 1936 in Elstal, in : Stefanie Hennecke und Gert Gröning (Hg) : *Kunst Garten Kultur*, Berlin 2010, S. 365-298.
- 52 田中辰明「海外情報 1936年ベルリンオリンピックの選手村」『月間建築仕上技術』 Col.41. No.485, 2015-12, S. 27-32.
- 53 キアラン・ファーヘイ前掲書122頁。

- 54 キアラン・ファーヘイ前掲書123頁。
- 55 面積2m半と3mの日本風呂で、ヤナを藁葺きにするものを予定。日本の女子選手は体操学校に、役員はアドロンホテルに滞在したと言う（東京朝日新聞、昭和11年5月22日）。
- 56 キアラン・ファーヘイ前掲書123頁。
- 57 田中辰明前掲論文、S.32f. キアラン・ファーヘイ前掲書、125頁。
- 58 アンドレーア・シュタインガルト前掲書56頁。
- 59 バイロイト祝祭劇場については以下を参照した。高島勲「象徴としてのバイロイト祝祭劇場」『建築文化』452号、1984年6月号、127-131頁。五十嵐太郎「楽劇という宗教儀式：バイロイト祝祭劇場」『Atプラス：思想と活動』25号、2015年8月、98-104頁。
- 60 Udo Bermbach : Die Bayreuther Festspiele : Idee - Ideologie - Identität - historische Einbindung, in : Erika Fischer -Lichte (Hrsg.) : *Theater und Fest in Europa, Perspektiven von Identität und Gemeinschaft*, Tübingen 2012, S. 334.
- 61 Udo Bermbach, a.a. O., S. 333ff.

図版典拠 図1～7 筆者撮影 撮影時期：2017～2018年